飯田女子高等学校 通信制課程

2025(令和 7)年度　学校評価の重点目標・評価項目・評価の観点

<table>
<tr><th>校教育方針</th><th>中・長期目標</th><th>次年度への課題</th></tr>
<tr><td rowspan="4">・本校は、教育基本法並びに学校教育法に則り、新しい時代に相応しい健全な家庭人、有能な社会人として、教養豊かなる女性教育を育成することを目的とし、特に仏教精神を基盤とした情操道義の教育に重点をおく。
・建学の精神「うつくしく生きる」を基とした教育活動を行う。浄土真宗の教えに基づいた仏さまの教えを通して「大切にされているわたしに目覚めていのちを輝かせる」教育活動を実践する。</td><td>・「いのちの教育」「こころの教育」を理念に据え、「人間力」を養い「学力向上」を実現する教育を実践する。
・通いたくなる学校、安心して学習ができる環境をつくり、社会の一員として「生きる力」を育む。
・生まれ育った場所で安心して学ぶことができる、地域から愛され、選ばれる学校になる。</td><td>・すべての学校の活動（添削指導・授業・行事・特別活動など）において建学の精神を基とした活動が実践できるように、通信制の会議で意識統一を継続していく。
・不登校経験者や特別の配慮を必要とする生徒、転入学者、課程変更の生徒など多様な生徒が在籍している。教職員間の情報共有を密にし、共通理解に努め丁寧な指導を心掛ける。また、外部の支援施設と連携指導する生徒はケース会議により情報を共有して個々の特性に応じた指導をする。
・本校通信制の様子をより知ってもらうために、学校 Web サイトで情報を効果的に発信していく。また、地域の人々とのかかわりが持てる機会を作っていく。</td></tr>
<tr><th></th><th>今年度の重点目標</th><th>次年度への課題</th></tr>
<tr><td></td><td>1 基礎学力の定着を図る添削指導や授業を心掛け、家庭との連携を深め自学自習の学である課題レポートを計画的に提出できるように支援指導をする。
2 生徒と教職員間の関係を良好に保ち、不安や悩みを持つ生徒が安心して相談しやすい雰囲気を作る。
3 開設２年目となる本校の教育連携協力施設の「伊那西学習センター」の自主運営化をすすめる。
4 姉妹校である飯田短期大学との連携による学習活動を計画し、本校の特色ある学びを実践する。</td><td>・基礎学力の定着を図る添削指導や授業を心掛け、自学自習の学びが身に付けられるように支援する。学校でレポート学習に取り組む生徒に対しては個々の生徒に応じて対応する。
・生徒と教職員間の関係を良好に保ち、不安や悩みを持つ生徒が安心して相談しやすい雰囲気を作る。場面緘黙の生徒に対しては筆談やスマートフォンのメモ機能等を使い質問に応じていく。
・家庭との連携を深めるとともに、地域の方々だけではなく、学園の短期大学との連携による学習活動を工夫する。</td></tr>
</table>

【達成度　A：ほぼ達成　　B：概ね達成　　C：変化の兆し　　D：不十分】

分野	重点項目 （具体的な取り組み）		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
全般	建学の精神 ・「いのちの教育」「こころの教育」を通してまわりからの「働きかけ」や「いのちの尊さ」に眼を向ける。 校長講話(始業式、終業式、課程変更式、転入学式)・釈尊降誕会・報恩講・特別活動、ホームルームを実施。	1	学校生活（授業・行事・特別活動など）において、建学の精神を基とした活動ができたか。	A	釈尊降誕会は校長講話と本校教員による法話によるお勤めをした。参加した生徒は、自らの生活を振り返り、感話にまとめ、今後の生活にどのように生かすかを考える機会となった。報恩講は本校国語科で仏教学を学んだ教員による講話を行い、命について考える機会とした。宗教科と連携して、釈尊降誕会は全日制と同じ会場・同日に実施、報恩講は講話の講師も含め別日程で行った。全日制、通信制の両方ができるように会場・日程を含めて年度当初に検討することができた。原則全員参加の釈尊降誕会・報恩講は昨年度より出席率が向上したが、この 2 つの宗教行事の大切さを生徒に伝え、さらに出席率を向上したい。	釈尊降誕会は全日制と同じ会場で時間を調整して実施する。そのために年度当初に連携をとって計画する。また、報恩講についても宗教科と連携し、通信制の生徒に合わせた行事にするために立案と計画をし、さらに生徒の出席率を向上させる。
	基本:生徒の伴走者としての教育活動に取り組み「BASE」を実施する。 ・B 課題レポート提出状況の把握と提出指導 ・A 生徒の個々に応じた教員からの挨拶や声かけ ・S 掃除をする時間を作るなどの工夫をし、美化に取り組む姿勢を育む。 ・E 登校した生徒が安心して生活できる環境作り	2	生徒の伴走者としての立場で普段からB（勉強）A(挨拶)S(掃除)E（笑顔）を意識し、学校生活を送ることができたか。	B	「B」(勉強)の課題レポートについては自習時間に一所懸命取り組んでいた。計画的にレポートに取り組めない生徒には各担任がこまめにレポート提出状況を確認して声かけや配信メールで連絡をして計画的に提出する生徒が増えた。「A」(挨拶)は個々の生徒に応じて声をかけた。挨拶が返せたり、表情で反応したりできるように今後も継続的に実践していく。「S」(掃除)については、第4時限目が終わった後、残れる生徒で協力し合って行った。「E」(笑顔)については、表情に表せない生徒もいることを配慮して生徒に接した。特定の生徒の言動や行動により、集中して自習に取り組む環境作りが昨年度はできなかったが、今年度はそのような状況がなく落ち着いた学習環境作りができた。担任は自分の空き時間と生徒の登校時間がそれぞれ違うので苦慮しながら、面談(短時間)や声かけを行った。学校生活を重ねるごとに生徒の表情や言動や行動でその成果が現れていると感じる場面が見られた。	「B」(勉強)の課題レポートについて、提出率や達成率で判断して提出を促す指導をする。 今年度は提出率の情報共有をして定例の会議で指導を検討し提出率向上に効果的であった。今後も、共通理解をして生徒の学習支援指導をしていく。
	南無阿弥陀仏の教え ・「大切にされているわたしに目覚めていのちを輝かせる」教育活動を丁寧に実践していく。	3	「私にかけられた願い」に気づき、ありのままの自分を受け入れ、生き生きとした生活を送るきっかけつくりができたか。	B	釈尊降誕会・報恩講などの宗教行事、仏教の授業を通して、「尊いいのち」をいただいて生きているということに目を向ける機会を持った。特に釈尊降誕会では生徒に今までの自分を振り返り、これからの自分について考える課題レポートを書く課題を与え、自分を見つめ直す機会としており、生活を重ねるごとに成長する姿がうかがえた。	これからも「大切にされているわたしに目覚めていのちを輝かせる」教育活動を丁寧に実践していく。

分野	重点項目 （具体的な取り組み）		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
学習指導	教育課程 ・新課程に移行したが、旧課程の生徒に対しても配慮して丁寧に運用していく。三観点別学習状況の評価の在り方を考えていく。	4	生徒の実態に即して新教育課程の編成およびレポート作成ができたか。	B	三観点別学習状況の評価をできるようにレポートやテストを行い、評価を実施できた。今後はさらにより良い内容にするために各教科担当者が努める。	三観点別学習状況の評価による生徒の学習状況の把握を学習指導に結び付けることを目的として評価し、検討していく。
	添削指導および授業の工夫・改善 ・生徒の興味関心を大切にしながら基礎学力の定着を図る添削指導や授業を心掛け、自学自習の学びが身に着けられるようにする。	5	添削指導や授業において、わかりやすい説明を心掛け、生徒の興味関心を引き出すことができたか。	A	学校生活アンケートでは 93 %の生徒がわかりやすいと肯定的にとらえている(昨年度比＋11%)。保護者の約 85%(昨年度比＋10%)が適切であると応えている。昨年度に比べて生徒アンケート結果がプラスになっている。保護者のアンケート結果から昨年度よりプラスになっているが今後も授業の工夫が課題である。しかし、小学校から不登校の生徒が多く基礎学習を学ぶ機会が少ないため勉強への苦手意識があり主体的に取り組めない生徒もいるのが現状である。特に数学は基礎的な計算問題からつまずいている生徒が多く、個別指導が必要なので、サポートの時間に個別に丁寧に教科担当者が指導した。	添削指導では必ずコメントを記入し、またスクーリングおいては、生徒の学力に応じて説明を工夫する。また、生徒の興味関心を大切にしながら基礎学力の定着を図る添削指導や授業を心掛け、自学自習の学びが身に付けられるようにする。数学は今年度も教科担当者の丁寧な個別指導が実践できているので今後も継続していく。
学習指導	・単位修得につなげる学習指導の確立。	6	個々の生徒の単位修得につなげられるよう、指導内容や指導方法の工夫、単位修得のために本人と保護者との面談を通じて事前指導することができたか。	A	週１日通学型と週 3 日通学型を保護者懇談会で本人と保護者、担任が相談し通学型を決定し、個々の生徒の希望に合わせて通学型を実施できた。また、レポート提出状況やスクーリングの出席状況に応じて、単位修得のために個別指導や保護者相談、面談を実施した。単位修得が困難な科目については卒業年度を考慮しながら、確実に単位が修得できる科目に絞って学習に集中できるように指導した。該当する生徒については今後も継続指導をしていく。	通信では、教員からの対面による指導を受ける機会が限定される。授業がないと登校しない生徒が多い。そのため通信システムによる連絡と場合によっては保護者と本人と直接話す機会を設け単位修得に向けて事前に相談していく。
	・自習教室に複数のサポート教員を配置し生徒の質問に応えられる体制にする。	7	自習教室で学習する生徒に対して、集中できる環境作りができ、レポート課題の提出率が向上したか。	B	質問したくても自発的に質問できない生徒、声を掛けられることを苦手とする生徒に配慮しながら、必要な生徒に対しては個別指導をして課題レポート提出の支援指導を行った。特に数学ではサポートの時間に個別に指導した。課題レポートの提出率の向上のためには今後も支援指導を継続する必要がある。	登校時の学習の機会を有効に利用し、担任が直接面談をして本人の困り感を共有して、提出を促すなど個別の学習支援を充実していく。

分野	重点項目 （具体的な取り組み）		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
	・教育のデジタル化を検討･研究していく。	8	ICT 教育の導入について検討･研究ができたか。	D	ICT 教育の導入についての検討･研究については全く進行していない。施設面では全館 WIFI が使用できる環境が必要である。教育のデジタル化（ICT の活用）は保護者の経済負担とそれに相当する活用効果の両面を考えて検討してく必要がある	全日制が使用しているロイロノートの活用、校舎への WIFI の整備等が検討課題である。
	家庭との連携 ・保護者との連絡を密にして学校方針を理解していただく。	9	学校からの情報を適宜発信し、家庭との連携を密にして学習状況を共有できたか。昨年度導入した校務支援教育システムを効率的かつ有効的に活用できたか。	A	業務の合理化を図るために、校務支援教務システム「Student Mypage Lite」を導入して 3 年目となった。生徒と保護者はマイページで学習(レポート・試験)の進捗状況を確認でき、自ら学習状況を管理できる機能は活用の差はあるが生徒、保護者には浸透したと思われる。また、必要な生徒は、保護者と本人に来校してもらい直接説明し、学習への取り組みの改善のために情報共有を行った。	校務支援教務システムは有効活用する。また、メール配信連絡だけでなく必要に応じて電話連絡をとり、面談により保護者との連絡を密にして、学校方針を理解を求める。
生徒指導	集団生活のルールとマナー ・まわりへの思いやり気配りができるように促していく。	10	学校生活を送るうえでふさわしい態度やマナーを身に付けさせることができたか。	A	生活アンケートでは生徒の 94%が校則やきまりを守っていると回答している。授業時や自習室利用時の取り組む態度や姿勢はよい。個々の生徒に応じて登校時や休み時間の声掛けにより限られた登校日数と登校時間で生徒の変化と自身の背景を把握するように各教員が心がけた指導を行った。生徒の変化に気づき事前指導や初期指導は課題として今後も取り組むことが重要である。	外見に表れる生徒の内面的な背景を理解した支援指導が必要である。必要に応じ保護者との連携や外部の関係機関と連携して指導をする。
	安心・安全な学校づくり ・生徒の変化に気づき、適切な対応を図る。早期発見と予防に努め、声掛け・個別面談を実施していく。	11	生徒の変化を見逃さず初期対応が適切にできたか。	A	学校生活アンケートでは保護者の約 98 %が安心して通わせることができると回答している。心身に問題を抱えた生徒が安心して学校生活を送れるように丁寧に指導した。様々な不安や悩みから言動に変化が見られる生徒に対しては、声掛けや個別面談（対話）を通して心の安定を図った。生徒の変化に気づく事前指導や初期指導は今後も継続し、課題として取り組むことが重要である。	生徒の変化に気づき、適切な対応を図る。早期発見と予防に努め、声掛け、個別面談を実施していく。

分野	重点項目 （具体的な取り組み）		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
	・生徒と教職員間の関係を良好に保ち、不安や悩みを持つ生徒が安心して相談しやすい雰囲気を作る。 ・教職員間の情報交換を徹底する。 ・スクールカウンセラー利用の調整や声掛けを行う。 ・必要に応じて専門機関等と連携した組織的な支援体制を構築していく。 ・成人年齢の年齢引き下げに伴い規範意識を育成する最後の機会ととらえ、心の教育を大切にする。	12	個々の生徒が抱えている課題を共有し、生徒の心の安定をはかる適切な支援ができたか。	A	登校時の様子を観察して必要な生徒には声かけや教員との情報共有をした。特に、不安定な生徒には担任が個別相談を行い、家庭と連絡を取り合った。また、関係機関(児童相談所、家庭支援機関、町村教育委員会)とのケース会議により、生徒の取り巻く生活環境の把握と生徒や家庭に対する支援指導のあり方を検討した。各機関がそれぞれの立場で支援するための情報共有を行い支援指導につなげることできた。今年度はスクールカウンセラーを希望する生徒と保護者はいなかった。	生徒の良好な関係作り。教員間の直接的、情報共有ツール（アセスメントシート）で情報交換と共有を行い生徒の支援指導に役立てる。関係機関との連携は教頭が窓口となり、各機関とともに支援体制を整え、全体把握をする。
	・年 2 回の懇談会に加え、必要に応じて保護者との面談を行い生徒への支援につなげる。	13	家庭との連携を密にして、学校教育に対する理解を深めることができたか。	B	学校生活アンケート調査では保護者の 85%(昨年度 88%)が学校は保護者との連携に努めていると回答している。前年比－3%であった。校務支援教務システム「Student Mypage Lite」のメール連絡や必要な場合は保護者と生徒の面談を懇談会以外での各担任が行った。スクーリング担当者、サポート担当者の多方面の指導を今後も継続し保護者への理解に努めていく。	学校教育の理解を深める事に困難な事例もあるが、各担任の丁寧な指導やスクーリング担当者、サポート担当者のそれぞれの指導の結果と考えられる。今後も継続的に個々に応じた丁寧な指導を心掛けていく。
進路指導	進学･就職指導の充実 ・多様な生徒の特性をふまえ個々に応じた丁寧な指導を心掛けていく。外部の様々な機関との連携を密にして進路実現のための指導をする。	14	個々の進路希望を把握し、情報を適切に伝え、本人の希望･適性にそった指導ができたか。	B	進路ガイダンスでは進路係の教員の話以外に地元で進学できる飯田短期大学、飯田コアカレッジに講師を依頼して行った。3 組の進路指導については計画的かつ個別指導の不足が数例あり進路指導の係と教頭がサポートに入って担任と協力して生徒に指導し進路実現を成し遂げた。2 組には来年度の進路に向けて準備ができるように 2 月に保護者、生徒対象に進路ガイダンス実施した。担任は生徒の進路に応じて面接練習や受験対策と卒業後に進路を決める生徒の指導するために個々に応じた進路指導に努める必要がある。 【卒業生 33 名の状況】 ４大：２名・短大：8 名・専門：９名 就職：５名・アルバイト：５名 未定：４名	個々の進路指導に対応するために、外部の様々な機関と連携してガイダンスを開催し、進路実現のための意識の高揚につなげ、進路について考える機会を設ける。担任だけでなく、複数の教員が関わる体制を作る。
	・段階に応じた進路講話、情報の提供により生徒の進路実現につなげる。	15	進路学習･進路ガイダンスを通して、自分自身について考え、進路意識を高めることができたか。	B	ホームルーム教室や事務室の掲示板に進路イベントの案内や進路関係の書類を掲示し、生徒に伝わりやすいように工夫し掲示した。	進路情報の充実・精選を図り、実情にあった内容の提供をする。

分野	重点項目 （具体的な取り組み）		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
	・模擬試験では効果的な実施後の振り返りができる体制を整えていく。	16	模擬試験や検定試験などの案内を行い、実施後の効果的な振り返りを行えたか。	B	英語検定、漢字検定は適時に案内をして生徒が受験した。卒業年度の生徒には模試の案内をして自宅受験を実施した。2組には進路にむけて模試や検定に意欲的に取り組むために、進路実現までの流れを具体的に説明する進路ガイダンスを保護者と生徒対象に2月に開催した。	段階に応じた進路講話、情報の提供により生徒の進路実現のための意欲につなげていく。内容は、実際の進路活動に活かすことができる企画、自己実現につながる企画を計画する。また、2組には2月に生徒･保護者対象に進路ガイダンスを実施し進路実現につなげていく。
特別活動	特別活動の内容の充実・改善・実施 人間性を育む場面となる校外学習や行事の充実を図る。	17	生徒が興味関心を持ち、主体的に学べる特別活動が実施できたか。アンケート調査により活動内容の振り返りができたか	A	前期には「茶道体験」「映画鑑賞」「東本願寺研修(3年ごとに行われる1泊2日の宿泊研修)」・を実施した。後期は「茶道体験」「スポーツ交流会(ボウリング)」「小旅行(東山動物園)」を実施した。多くの生徒が参加し交流の場となった。人と関わる活動や人と関わることが苦手な生徒でも参加しやすい活動をバランス良く計画した。今年度は特別活動ごとに参加した生徒にアンケートをとり、企画の振り返りを行った。企画に対して良かったという感想がほとんどであったので今後も継続していく。	特別活動を単に卒業に必要な時間としてとらえるだけでなくて、社会性を育む場面と考え今年度のアンケートを元に、校内外で個人や友人と参加できる活動を両面で企画する。
学校運営	円滑な学校運営 ・職員会等を利用して通信への理解を深めていく。	18	学校全体の教育活動が円滑に進むように全日制課程との効果的な連携を図ることができたか。	A	全日制と共通である進路(特に就職関係)、奨学金の説明と申し込み、各種検定・模試等は全日制と連携して実施した。通信制の授業や行事がある時には、全日制の生徒により通信制の生徒が不安にならない配慮をあらかじめ伝え、協力を得たため大きな支障はなかった。	全職員が全日と通信の兼務であるが、実際、通信の授業を担当していない場合、なかなか通信への理解は深まらない。そのため、職員会等を利用して通信への理解を深めていく必要がある。
	・生徒のデータの管理･編集をするとともに通信制職員の会議を行い情報共有と職員の意識統一をしていく。	19	生徒のデータ管理と正確な資料作りにより、校務と各指導を円滑に進める、校務支援教務システム効率的に有効活用ができたか。	A	IT 化により業務の合理化を図るために、校務支援教務システム「Student Mypage Lite」を導入して3年目となった。それによりスクーリング、レポート、試験の業務運営は一括管理することが可能となった。更に、生徒と保護者はマイページで学習(レポート・試験)の進捗状況を確認でき、自ら学習状況を管理できるようになった。また、日常の登下校も QR コードの読み取りにより容易に管理できるようになった。更に生徒指導要録と調査書も作成しやすくなった。	新システムを導入して合理的に業務が運営できている。更に生徒の学習状況の把握等で機能を有効活用する。

分野	重点項目 （具体的な取り組み）		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
	・校内施設・設備の不備を点検し、安全で学習しやすい環境づくりに努める。	20	校内施設・設備の不備を点検し、安全で学習しやすい環境づくりのため、改善を図ることができたか。		今年度は特になし。	伊那西学習センターの学習施設を再検討し、充実させる。
	・本校通信制の学びの特徴について周知していく。	21	学校説明会と学校見学（随時）を実施する。また飯田下伊那地域と上伊那地域で開催される不登校生徒の合同相談会に参加して、本校の情報提供ができたか。	A	昨年度から全日制の進学説明会の同日(11 月と 12 月)、全日制進学コースの説明と同時間(午前)2 回実施した。その他、中学校を通して学校見学および個別相談を随時受け付けた。転入学希望者にも同様である。また、不登校生徒の場合、本人と保護者の両者がそろって学校説明を受けられない場合もあるが、保護者のみにも対応した。 県教委南信教育事務所主催の「不登校生徒の進学相談会」が開催され、飯田会場(2 回)上伊那会場には 10 月から教育協力連携施設として開設した「伊那西学習センター」でブースを設け対応し、多くの相談者に対応した。	更に本校通信制を周知するために生徒募集につながるために地域の月刊誌や新聞への広告または中学校宛てのチラシを作成する。最初から通信制を考えて相談するケースが増加傾向にある。いずれにせよ生徒および保護者の不安に寄り添える対応を心掛ける。
	開かれた学校づくり ・本校通信制の様子をより知ってもらうために、学校 Web サイトで情報を効果的に発信していく。	22	Web サイトに掲載する内容の工夫改善を図り、本校の学びの特徴がわかる情報を提供できたか。	D	学校 Web サイトで日常生活の情報を見やすく公開した。担当者がその他の校務で忙しいため、昨年度のように発信することができなかった。互いが協力し合い発信する必要があった。	本校通信制の様子をより知ってもらうために、学校 Web サイトで情報を効果的に発信していく。
	・地域の方に来校していただき講演していただくなど生徒の学びを深めるなどの連携を図る。総合的な探究の時間においては、地域の方の協力だけでなく、姉妹校である飯田短期大と連携して更に本校の特色ある学びを実践する。	23	飯田短期大学と保護者や地域との連携強化を図る取り組みを行うことができたか。	B	学園内の短期大学との高大連携が本講の特色と考え、「総合的な探究の時間」において飯田短期大学の友竹教授に依頼をして「食と健康」について講義を依頼して生活習慣の一部である食事問題点と改善点を考え、健康的な食生活について考えを深めた。	総合的な探究の時間だけではなく、更に高大連携事業を検討し、特色のある企画を計画する。また地域活動と特別活動を連携させた企画を検討する。

学校関係者評価

○設立 9 年目になり学校の取り組みが良くなっていると感じる。在学中に進学、就職の進路を決めて卒業をする生徒が増えてきている進路状況の報告を受け、小学校や中学校の学校生活に苦労した生徒が社会に巣立つ生徒が増えていることは喜ばしいことである。

○人物をみて採用をしているので企業側(販売業社長)からは通信制の生徒であろうと、全日制の生徒であろうと採用する側については差異がないと思っている。